

## 博士論文審査委員会報告書

提出者： 4003S018-4 鄭成

論文タイトル：国共内戦期の地方レベルにおける中共・ソ連協力関係—旅順・大連地区を中心—

論文名英訳：The Cooperative Relation between Communist China and Soviet Union in Local Level in the Civil War

### 1. 概要：

本論文は第二次世界大戦終了直後から中華人民共和国成立直後まで、特に国共内戦期の中国とソ連の関係史をオリジナルな問題意識と新鮮な分析視角から考察しようとしたものである。すなわち国民党政権、中共政権そしてソ連の三つ巴となった遼寧省・旅大地区に焦点を当て、もともとスターリンの指示によって国民政府を相手とした中ソ友好同盟条約が締結された(1945年8月)背景の中で、どのようにして中共・ソ連の協力関係が形成されたのか、中共とソ連の連携・協力の実態はどのようなものであったのかを明らかにし、それを踏まえて地域史の視角から当時の中ソ関係を再構成しようとしたものである。

### 2. 本論文の構成：

#### 序 論

第1節 問題提起と課題設定

第2節 先行研究

第3節 研究内容と論文構成

第4節 研究手法と利用史料

#### 第1章 戦後の東北地域を取り巻く情勢

第1節 ソ連と中共、国民政府の三者関係

第2節 中国国内の反ソ運動

小 結

#### 第2章 進駐初期における中共とソ連の接近

第1節 ソ連軍の軍紀荒廃による住民への暴行

第2節 ソ連軍進駐後の治安措置

第3節 乱立した各勢力

第4節 ソ連軍からの「ラブコール」と中共旅大政権の樹立

第5節 中共旅大の政権基盤強化

小 結

#### 第3章 旅大地区の中ソ協力体制と劉順元辞職事件

第1節 中ソ協力体制の初期構築

第2節 劉順元事件の発端

第3節 劉順元辞職事件背後の中共・ソ連の対立

小結

第4章 中共とソ連の経済協力関係

第1節 占領初期における中共側の経済活動（1947年春まで）

第2節 同時期のソ連軍側の経済活動

第4節 中共旅大の兵器生産

第5節 貨幣発行及び財政工作から見る中ソ協力関係

小結

第5章 『実話報』から見たソ連側への中共援助

第1節 『実話報』の概況

第2節 『実話報』社内の中ソ間の連携

第3節 平行線で活動する中ソ両党の党支部

第4節 『実話報』の終刊

小結

第6章 ソ連軍当局の対外宣伝ー『実話報』記事を例に

第1節 「中ソ」友好のテーマ

第2節 ソ連の先進性

第3節 反米世論攻勢

第4節 西側諸国との協力可能についての示唆

小結

終章

参考文献

文末注釈

### 3. 内容

序論では、全体の問題提起と先行研究の整理を行い、同時に地方レベルの研究視点の重要性を提起した。第1章では戦後の中国東北地域を取り囲む、中共、国民政府、ソ連、アメリカの複雑な四者三国関係と内外情勢の流れを整理している。第2章では従来の先行研究では系統的な研究がなかった中共とソ連との旅大地区における接近のプロセスを、第一次資料を丹念にフォローしながら明らかにしている。旅大地区の中共とソ連の接近は、ソ連側の主導で進められたものに対し、中共側がそれに速やかに対応することによって自らの活動空間を広げたといたという事実を明らかにした。第3章では旅大地区の行政運営における中共・ソ連の役割分担を紹介したうえ、中共の旅大地区指導者・劉順元の辞職事件を通して、両者間の衝突の原因とその回避のプロセスを分析した。第4章では旅大地区の中共とソ連の経済面における協力関係を考察している。中共とソ連双方にとって、旅大

地区の意義は単なる政治上、軍事上のものにとどまらず、中国有数の近代化した工業基盤が整えた大都市としてその経済的意義も大きかった。具体的に見てみると、中共側は旅大以外の中共の解放区を支援する重要な物資供給基地となり、武器弾薬、医薬品、布などを生産し提供した。ソ連側にとって旅大は極東地域において獲得した唯一の不凍港であり、30年間という支配期間を視野に入れて戦略を立てていた。中国側はソ連の戦後経済復興の支援を大いに期待し、このように旅大地区は双方の経済的需要が高いが故に、いかに協調して、双方の需要に応じていくかが課題となった。相互の協力関係の主な特徴として特に以下の5点があげられる。①旅大地区の工業設備に対するソ連軍の接收工作—これによって、旅大地区の工業基盤が受けた損害が東北の他の都市と比較すれば軽微にとどまった。②中共の「敵偽財産」接收工作—これは、中共旅大の重要な財源となったが、国民党政府との関係を持つソ連軍当局に抑制される。③中ソ合弁企業である大連船渠—船渠生産はあくまでもソ連側の経済需要が優先され、中共旅大の独自の造船工場建設計画はソ連側から援助を得られなかった。④中共旅大の兵器弾薬生産—中共支配域内でもっとも大規模で、高技術の兵器弾薬生産基地となったが、武器弾薬の開発において中共はソ連軍当局から技術面の援助を受けられず、すべて自力で行う。⑤貨幣発行及び財政工作—ソ連軍当局のソ連軍票強制両替政策に対し、中共幹部は一般市民の利益を損なうと反対、しかし結局政策の遂行を阻止できず。第5章では中共側からのソ連への援助活動の実態を考察する。具体的には、中共旅大の協力を得て、ソ連軍当局が発行した、現地中国人読者向けの中国語新聞『実話報』の内容を分析しながら、中共側の支援活動、新聞社内の中共・ソ連協力体制などの状況を明らかにした。中共旅大は『実話報』に対して、献身的かつ持続的に人材援助を行ったが、中国人スタッフが『実話報』社内で編集方針に参加できない立場であった。これは当時の中共・ソ連間の協力関係を別の側面から集約的に反映している実例である。第6章ではソ連軍がいかに旅大地区で対外宣伝を行い、中国人の対ソイメージの改善を図ったかを、『実話報』掲載記事を通して考察した。中ソ協力の現場の実態を見ると、日常行政業務におけるソ連側の干渉や、工業設備の大量持ち去り、あるいは中国人女性に対する暴行事件などによって、ソ連軍と接する中共幹部に不満が生まれ、一部の幹部の対ソ協力は徐々に消極的となり、中ソ協力の現場に混乱が見られる。中共当局は、このような現象に対処するため、度重なる会議、思想教育活動を実施して現場の幹部の認識を統一させ、一方的な譲歩をもって両者間の衝突激化の回避に努めるなど、ソ連側に対して最大限の協力姿勢を貫いていた。ここではこのような中ソ間の動きを『実話報』の日常運営を具体的にみることによって明らかにした。ただし、『実話報』の掲載記事の内容は、主としてソ連国内と国際情勢についての報道および宣伝から成り立っていた。ソ連社会主義制度の先進性と「中ソ」友好という二大テーマから構成した前者は、中国において自国のイメージアップを図るというソ連側の意図によるものであることは明白であった。終章では以上のような考察をふまえて、研究の全体的な意義をまとめている。特に旅大地区における中共・ソ連軍の関係を実証的に明らかにしながら、地方レベルにおける中共とソ連の協力関係の

特質をまとめた。当時の現地における中共・ソ連間の協力関係は、相互の力関係に影響され非対等的なものであった。それは様々な努力によってある程度好転を見せたものの、中ソ相互の間に基本的には信頼関係が形成されなかった。その理由は何よりも相互理解が欠乏したまま、両方とも自己利益を優先したほかならない。

#### 4. 評価と問題点

以上の内容に対して審査委員会は以下のように評価点と問題点を指摘した。すなわち評価すべき第 1 の点は、本研究が従来の中共・ソ連関係研究で見過ごされた地域レベルの中共とソ連軍の協力の実態を解明することに主眼を置き、1950 年の中共・ソ連同盟関係形成の紆余曲折の過程を地域史視点を加えることにより、より豊富な理解を可能にしたことである。従来の中ソ関係先行研究がしばしばその形成過程を「困難な道のり」と表現してはいるものの、もっぱら指導部レベルの信頼関係醸成の難しさに注目してきた。確かに双方の指導部が、刻々と変化する流動的な国際情勢の中、各自の戦略意図を持ちながら、これまでの中共・ソ連両者の歴史の流れの中で、相互の真の意図を探り合って、最終的に同盟関係までたどりつくのは、尋常な過程ではない。とくに実務を担う各レベルで関係をつくる基盤を整備していなければ決してトップレベルでの同盟関係も強固なものにはなりにくい。この意味で、本研究はこうした中共・ソ連協力関係の形成過程を、これまでの先行研究が見過ごしてきた現場、すなわち相互の協力活動が展開された地域＝旅大地区の動向を分析しつつ中ソ関係の歴史的意味を考察したところに意義がある。

第 2 の点は、多くの第一次資料、特にこれまでだれもが用いてこなかった『実話報』という当時の現地の新聞の内容分析を試みたことである。またそれを補完する当時、この新聞に直接かかわってきた人物への直接のインタビューを実施していることも、本論文を書くもんの価値の高いものになっている。

第 3 の点は、本研究が単なる過去となった歴史のある一断面を明らかにすることにと黙るのではなく、中ソ関係の本質に迫っていることである。共通のイデオロギーがあって、共通の利益関係がある。にもかかわらず相互の間に真の信頼関係が形成されず、わだかまりを抱いたまま、協力しあう。その結果は国民レベルの真の友好関係につながることはなかったという観点を提示している。今日の日中関係も含めて、21 世紀初頭の今、国と国の間、違う国の国民の間に、不信感のない、安定した友好関係をいかに構築するのかという課題を検討する際、有益の思考材料となるという含意がある。

しかし問題点がないわけではない。第 1 には、日本語の問題である。誤字や脱字はもとより、日本語として適切でない表現なども目に付き、本論文の価値を低下させていた。第 2 には、『実話報』という一級の第一次資料を入手しその分析に力を注いだことは評価できるのだが、第 4 章までの分析と必ずしも十分に有機的なつながりをつくることができず、折角の苦労を生かし切っていないという印象を残した。

## 5. 結論

上記のような問題点は指摘されたが、この論文が中共とソ連の初期段階の歴史的関係を考察する上で、新たな視点と分析アプローチ、それに基づく新たな見方を提示した点は評価できるものであり、論文審査委員会は博士学位に値すると判断し、博士の学位授与を提案する。

2009年1月8日

博士学位申請論文審査委員会

主査	早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科	教授・社会学博士(一橋大学) 天児 慧
----	-----------------------	------------------------

副査	早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科	教授 村嶋 英治
----	-----------------------	-------------

副査	早稲田大学 社会科学総合術院	教授 劉 傑
----	-------------------	-----------

副査	東京大学大学院	名誉教授・社会学博士(東京大学) 石井 明
----	---------	--------------------------